

中国との関係性の構築を通じた木曾漆器産地の形成に関する

歴史・地理的研究

謝 陽

論文構成

- I. 本論文の問題意識と研究目的
 - 1. 「工芸」における「伝統」
 - 2. 日本の漆工文化
 - 3. 日本漆工における「中国産」
 - 4. 漆の特殊性
- II. 本論文の視角と分析枠組み
 - 1. 地場産業研究における社会的・文化的な視点
 - 2. 新しい地誌学と場所論
 - 3. 産地の地理的スケール
 - 4. 具体的分析対象・手法
- III. 戦前から生漆貿易の発達と産地の形成
 - 1. はじめに
 - 2. 戦前における日中生漆貿易の実態
 - 3. 港地域と漆産地の発達
 - 4. 生漆貿易ルートと漆商人
 - 5. おわりに
- IV. 木曾漆器産地における中国産生漆輸入の歴史
 - 1. はじめに
 - 2. 檜川村の漆器生産と生漆事情
 - 3. 戦後の日中関係と檜川村
 - 4. 日中友好活動の発展
 - 5. 漆器業者Y氏, K氏による活動
 - 6. おわりに
- V. 木曾漆器における中国産製品の位置づけ——伝統工芸の再構築について
 - 1. はじめに
 - 2. 漆器製造の歴史と特徴
 - 3. 漆器製造業者の生産と販売現状
 - 4. 中国生産関係の発生と産地の発展
 - 5. おわりに
- VI. 結章

補論：生漆の栽培と集荷についての考察——湖北省恩施自治州を事例に——

- 1. はじめに
- 2. 中国産生漆の質についての言説
- 3. 集体生産時期の生漆生産
- 4. おわりに

論文要旨

本論文は中国産漆や漆器製品との関係を作り出す過程でその場所の地域性が浮き彫りになり、その日中間の関係性を探求することによって、現在の木曾漆器産地の形成過程が明らかになると考える。そのためには、単なる商品の交換や流通だけでなく、そのコンテクストをなす政治関係、文化規定や経済要素を含めて中国との関係性を総体として理解し、歴史・地理学的に木曾漆器産地を研究する必要がある。歴史・地理学的な視点をを用いれば、長野県木曾檜川という漆器産地の形成は、社会・経済・政治的なコンテクストにおけるさまざまな主体が、多様な地理的スケールで繰り返す複雑なプロセスだと考える。本論文はこれまでアカデミックな研究構造に看過されてきた中国産漆製品と日本の漆器産地との関係に注目し、それらの関係性の構築を通して、木曾漆器産地の伝統および産業構造の再構成が図られ、さらに新たな地域の文脈と歴史を織り成す過程を明らかにすることを目的とする。国家イデオロギーや時代性と密接に関係し、ダイナミックな展開を呈している漆を手掛かりに、漆の周辺にある複数の関係性への分析を通して地域の動態をとらえようとする。各々の関係性の構築には地域の主体と社会構造との相互のかかわり合いが展開され、複数の地理的スケールを用いることによって立体的な地域性を描くことを試みる。論文の本体は①生漆貿易をめぐる漆産地の形成、②日中関係友好運動と表象としての地域、③伝

統の構築と中国産漆器製品との関係、三つの側面である。また、漆の社会的諸関係を見る上では、漆そのものの物質的な性格及びそれに埋め込まれた社会関係を考察する意義が大きい。漆の生態学的、制度的、政策的な条件を中国の生産地において調査し、巻末に補論とした。研究手法は地域調査のフィールドワークを中心に、史料収集、文献調査を併用する。フィールドワークはインタビュー、参与観察の質的調査を主とし、産地の漆器製造業者の現状についてはアンケート調査も加えた。

Iでは、本研究を始めた問題意識と研究目的を明らかにし、本論で論じる木曾漆器産地と中国との関係の前提となる日本と中国の漆文化の相違とその両者のかかわりの歴史的背景を述べる。日本の工芸ジャンルの形成や漆工文化の発達は明治国家のナショナリズムの高揚と富国強兵政策と深く結び付けられ、木曾漆器は日常調度品として庶民的な性格をもち、工芸美術としての漆工文化に対して下位におかれている。その階層構造における位置づけは中国との関係性のあり方に強く影響したと考える。

IIでは、本論文が依拠する研究の枠組みを提示し、それについて検討を行った。本論文はギデンズの構造化理論と時間地理学を統合するアプローチを主張するプレッドと、構造的アプローチで空間的分業を研究するマッシーの理論を参照した。プレッドは個人に焦点をあてて、日常生活から生涯レベルにいたる社会・空間構造の組織化を、時空間パスの結合と歴史に依存した過程としての場所を概念化した。「場所は一つの過程であり、その過程を介して社会的・文化的諸形態の再生産、各々の個人誌の形成、自然の変形がやむことなく相互生成し、同時に時間・空間の種別的な諸活動や権力諸関係がやむことなく相互生成する」(プレッド、西部均 訳 2004:151)。一方、マッシーは同じように歴史が場所の形成において重要な役割を果たすことに注目し、空間を、権力を含む社会的諸関係の観点から概念化しようとしている。地域経済の構造は、歴史的に形成されてきた個々の空間構造の結合による産物としてみることができるといふ。マッシーは空間的分業の視点から、生産関係が社会的、経済的文脈によってコンテクスト化されるとする。また外部とつながる多様な主体によるグローバルな場所感覚が構造的コンテクストの中で様々な形で現れていると提示している。

IIIは戦前からの生漆貿易の発達と産地の形成について、文献史料をもとに検討した。長江流域の開港は長江航路の発達を促し、地域的経済連携も一体化されていった。その中でも、日本商人の進出に伴い、漢口と宜昌は重要な買付拠点となった。一方、奥地の漆資源の開発は商業

資本の投資に刺激されたものであった。そこで重要な役割を果たしたのは外来の商人である。日本の漆商は漢口、宜昌に支店を設ければ上海の税関を通さず、直接、漢口と宜昌で通関の手続きを済ませ、日本へ発送できるという流通上のメリットがある。また、産出地に近い立地にいることは人間関係の創出に非常に有利だと考えられる。日本商人と江西商人との信頼関係は良質な漆の供給の保障と地域ブランドの創出につながった。

IVでは、エージェントの個人誌を手がかりに木曾漆器産地における中国産漆の輸入の歴史を追跡してみた。日中関係の緊張した時代背景の中で、個々のエージェントがそれぞれの戦前の経歴をふまえて独自な中国とのかかわりを展開していたが、それに対する評価は異なっている。このような扱いの相違はエージェントの異なるパーソナリティや生い立ちによって決められたというより、権力構造の選択として作られた歴史だと考える。戦後日中国交断絶の状況では経済連携が途絶えてしまい、なお、計画経済体制の中に商人にかかわって政府の役人が貿易を介在するため、戦前のような信頼関係の強い貿易パートナーが得られなくなった。

一方、政府間の敵対局面が変わって民間のルートを通して国交の回復を促そうとする中国の対外政策の一環として日中友好協会はきわめて重要な役割を果たしていた。このような政治的構造の網目の一つに日中友好協会があり、楢川村はその日中友好協会の末端に位置し、日中関係の政治的構造の中に嵌めこまれていた。一方、中国の対日政策においては、リーダーの役割を重視し、信頼してきた経緯があり、人と人との間の絆が国交回復への糸口として見なされてきた。このような当時の日中関係の特殊性もエージェントの活躍に大きな舞台を提供したといえる。

Vでは、漆器製造業者を対象にするアンケート調査と特定の業者への個人誌の聞き取りをもとに、1980年代以降中国産漆器製品の大量輸入を背景にした木曾漆器の構造転換と中国産製品の取り入れをどのように行ったのかを考察した。アンケート調査の結果から、全体の中に多数を占めている小物製品の製造・販売を主とする事業所の姿が見えてきた。漆器業者が大物製造から小物製造へ転換しようとするとき産地内技術の不如意に直面し、外部からの安価な製品の流入を認めた。この意味から、製品転換を行った業者にとって、最初から中国産製品を木地として不得意な技術の補完策として考えたことがわかる。また、できるだけ中国産製品を扱わない、または全く扱わない事業所は、個人消費者を対象に製品の販売を考え、自家製造のオリジナリティを主張している。その

背景には中国産製品の品質をマイナス要因と評価していることと、量産用の中国産製品を小規模生産で使用する需要が低くなることが考えられる。一方、質的調査から楢川産地を支えている中国産家具の製造をとらえることができる。単純に生産コスト削減を考えた上での行動だけでなく、楢川産地では製造できない部分を中国に持っていったのである。

補論では、中国湖北省恩施自治州の毛壩漆を対象に、漆商人や漆農家への聞き取りを通して、流通上の問題や農家生産の実態を明らかにした。中国解放前と解放後の生漆貿易、計画経済体制と市場経済体制下の漆生産を比較してみれば、偽物問題の深刻化の原因が明らかになる。解放前生漆貿易を担っていたのは同郷出身の漆商である。彼らは郷里を出てよその土地で商売をする上では互助関係を結び、強い信頼関係を保っていた。それに対して解放後～改革開放は戸籍制度で個人の移動が厳しく制限され、解放前のような同郷関係が存在しなくなり、民間結成団体もすべて取り締まられていた。偽物問題は一部個人の責任として単純化されるものではなく、当時の政治経済体制による人間関係の信頼性の欠如に由来するのである。

VIでは、以上の調査を経て、木曾漆器は外部からのまなざしを受けながら、地域の文脈に踏まえたうえで、多様な事業展開を図り、中国産漆器製品を対立した他者か

ら産地構造に取り込み、地域を再興してみたプロセスを明らかにした。従来の間屋一職人の産業構造が弱小化し、個人、コミュニティ、地域が産業の振興や産地の活性化に前面に出てきた傾向では、産業経済的な側面を強調する視点が時代遅れであり、また社会・文化的な側面に注目することによって非経済的な要素が産地の再構成に働いていることが確認できた。方法論への検討では筆者の中国人留学生としてのポジショナリティが本研究テーマと微妙な形で相互作用し、フィールドワークから得られた知見は木曾漆器産地の地域性と筆者自身の経歴や属性とを融合したものと考える。

参考文献：

- マツシイ, D. 著, 富樫幸一・松橋公治 監訳. 2000. 空間的分業: イギリス経済社会のリストラクチャリング. 古今書院
- ブレッド, A. 著, 西部 均訳. 2004. 歴史的にコンテイングエントな過程としての場所一構造化と場所生成の時間地理学一. 空間・社会・地理思想 9: 148-167.

しゃ・よう

博士後期課程ジェンダー学際研究専攻2012年度修了

A historical geographical study on the reconfiguration of the Kiso lacquerware region through the relationship with China

XIE, Yang